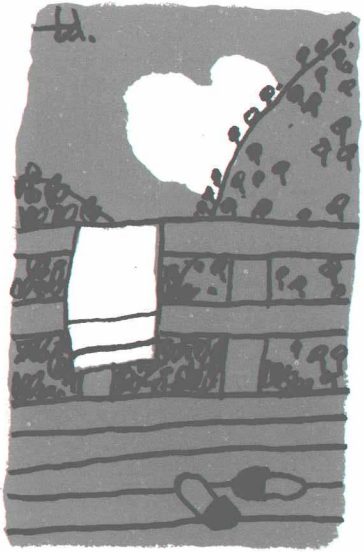
森村 桂

日本を行く

森村桂日本を行く

講談社



〈同じ著者によって〉
いわせてもらえば（講談社刊）
森村桂アメリカへ行く（講談社刊）
二年目のふたり（講談社刊）
お嫁にいくなら（講談社刊）
Lサイズでいこう（講談社刊）
友だちならば（講談社刊）
ビジョとシコメ（講談社刊）
お隣りさんお静かに（講談社刊）
青春がくる（講談社刊）
おいで，初恋（講談社刊）
ふたりは二人（講談社刊）
結婚志願（講談社刊）
チャンスがあれば（講談社刊）
違っているかしら（オリオン社刊）
天国にいちばん近い島（学研刊）

森村桂日本を行く

1969年10月20日　第1刷発行

著　者　森村　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号　112
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　山晃製本株式会社

定　価　320円

Printed in Japan　© Katsura Morimura 1969
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

(分)0-0-95(製)123301(出)2253 (0)

目

次

寝屋子と海女の島……7
南九州観光業者の底力……39
いちばん近い日本のハワイ……69
古き異国人の町ナガサキ……93
弥次さん喜多さんもうひとり……113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

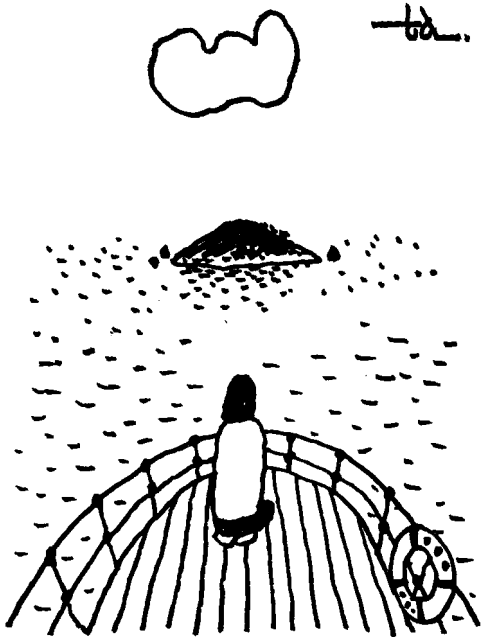
萩に残るよき時代の心……139
サイロの国よ、今日は……161
恐山で父をよぶ……187
日下部家と飛驒の町……215
あとがき……237

装幀
宮田武彦

森村桂日本を行く

本書は『旅』に「弥次喜多道中記」の題で昭和四十四年二月〜十月に連載。出版に際して加筆しました。

寝屋子と海女の島



「ねえ、どっか生きのいいお魚食べられるとこで、いいとこ知らない」

十一月の半ば、私は旅行好きの友だちに電話する。

「答志島行きなさいよ。こないだ名古屋にいる兄貴がいってきたのよ。あわびがおいしいんだって」

「あわび?! よし、決めた」

「でも、気をつけなさい。そこ夜這いの風習があるんだって」

「何ですって」

「寝屋っていってね。結婚前の男の人たちは一軒の家借りて、そこで共同生活するんですって、そこから夜になると、夜這いに出るんだって」

「そんな島、いま時ある?」

まあ、いいや、面白い。だいたい私は島といわれるとゾクゾクするたちだし、そんなおかしげ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

なる風習が残ってる島なんて、ちょっと今時、楽しいじゃないか、よし、オフクロさま護衛に、行くとするか。

「わあ、飛行機みたい」

生まれてはじめて名古屋から近鉄特急というのに乗って二人はびっくり、飛行機のように前の座席の背からテーブルがひき出せるのだ。今は十二時二十分。

「おなか空いたわね」

「うん」

電車が動き出してしばらくすると、エンジ色の制服を来た車内嬢が、全員に蒸しタオルのサービスに現われた。

「すごいサービス」

「さあ、何食べようかしら」

おしぼりでいい気持になりながら、

「お食事はどうぞ車内販売を御利用下さい」

というアナウンスをうっとりと聞く。さて、何にしよう。ところがどうしたわけか、一向にその車内販売嬢が現われない。前の車輛には配っているのに。

やっと、彼女がこっちの車輛に来たので、私はすぐに手をあげる。

「お弁当ですか、全部売り切れました。ピーナッツにさきイカはいかがですか」

「売り切れですか」
がくぜんとした私たちの声に、まわりの新婚さんたちからもあきらかにショックのさざめき。そんな、罪な。蒸しタオルなんかくれといて。
「おなか空いたわね」
「空いた」
すっかり蒸しタオルでおなかの方はそのつもりになってしまったものだから、私もオフクロさまも、ヒイヒイだ。
一時五十分、宇治山田で降りるや、私たちはタクシーに乗る。鳥羽まではタクシーで二十分というが、三時の船に乗り遅れたら大変だから、食事は着いて、安心して食べることにする。まあそれまでのがまんがまん。
「桂ちゃん、何よ、お土産は帰り、帰り」
赤福餅を買った私を、オフクロさまはタクシーからどなりつける。オフクロさまがヨーロッパに行った時、
「お母さん、旅行のコツはね。荷物を持たない、手紙を書かない、お土産を買わない、この三つよ」
とコンコンといったのに、自分はどっかへ旅行する度に、お土産いっぱいかかえて帰るもんだから、オフクロさまはすぐなじる。

「何いってんのよ、赤福買わないで、伊勢へ来たってしようがないわよ」
内宮さまとか外宮さまには申しわけないが、私しゃ修学旅行で、伊勢じゃ、さんざ歩かされて、ただの門しか拝ましてもらえなかったのに、それにひきかえ、赤福餅はやたらおいしく、これだけで伊勢へ行ったって記憶が残ってるんだ。その赤福買わないでいられよか。名物にうまいものなしというけれど、名物買うなといわれたら、私しゃアホらしい、旅行なんてするか。
「どこがおいしいかしら」
「うん」
鳥羽に着いて、食堂の看板を見わたしたが、どうも解らない。人はパンのみにて生くるものにあらずって誰かいったらしいが、一回の食事がおいしいかまずかったかで、その日の気分は大きく左右される。
「そうだ、こういう時にはタクシーの運転手さんに聞けばいいのよ」
知ったかぶりをするクセのある私は、すぐ前の案内所に聞きにいく。タクシーのおじさん二人、
「そうさな、その前の二軒、どっちでもおいしいんじゃないかな」
「じゃあ、ここにしようか」
すぐ前の、二階が食堂になってるお土産屋さんに入ろうとすると、タクシーのおじさんの一人がとんでくる。

「ねえちゃん、隣は下で食べられるよ」
おじさんは、私たちの手をとらんばかりにひっぱっていってくれる。なるほど、おナカの空ききった身には、階段昇るのはたしかにしんどい。私たちはガランとした店内の、座敷風になってるところに上がる。
「さざえの壺焼にしようかしら、でも、早く出来るものがいいわね。チキンライス下さい」
「私は、オムライス。それにおつゆ」
チキンライスとオムライスがやってきて、私は勢いよく口に放りこむ、とたん、
「ウッ！」
私は口から鳥を吐き出し、洗面所にかけこむ。何度もウガイをする。臭い。腐っているのだ。母も口を押えて走ってくる。
「そうですかあ？　あら、ほんとだ。すみませんねえ」
店の人が匂いをかいで、お金を返してくれる。
「どうしよう、お母さん、他のもの注文する？　親子丼かなんか」
「だめよ、鳥が腐ってるんですもの」
「そうか。よそ行く？」
「時間がないわ。あ、赤福餅食べましょうよ」
「ほおら、みなさい」

母と私はお箸をもらって、赤福餅にかじりつく。ああ、やっぱり赤福はよい。もっとも、甘いものだけじゃ、ごはん食べた気はしないけど。

「答志島に行ったらたくさん食べましょ」

「そうよ。あわびがあるわ」

私たち母子は慰め合い、はげましあって、何となくフラフラする足どりで、荷物をかかえて、船つき場にいそいだ。

三、四十人でいっぱいになる古い蒸気船に乗り込む。湾の向うにいくつもの小さな島がある。答志島は向うの、まるで山脈のように見えるひときわ大きな島だ。あいにく曇りで寒い。

「中に入りましょうか」

「ううん、外にいる」

せまい部屋はエンジンで臭いから、私は甲板のベンチに坐る。名古屋弁なのだろうか、にゃあもとか、きゃあもとかズボンをはいてネンネコを着た女の人たちがしゃべっている。

ボッボッボッボ

船は動き出した。風は冷たく強く、なまり色にみえる波は重く大きく、船にせまる。二十分もすると身体が冷えきるけれど、でも、私は下に行かない。いちばん前の船先に坐って、じっと波を見つめ、向うの島を見やる。

灰色に黒っぽく見える樹々、港、まるでそこだけにはりつけたような小さい家々、船はホルモ

ン焼の看板の大きく目立つ和具の港に寄り、それから、答志の港に向う。

荒い波に洗われたばかりの島が顔を出す。そこに打ちつける波は、白くみどりで美しい。雨が降ってきた。

だけど、やっぱり私は下りたくない。コートでしっかりと脚をおおい、両手をポケットに入れて、吹きさらされるのもかまわず、島に、波に見入る。

やっぱり船はいい。何故だか、どうしてだか、この風は、においは、そして波は、私になつかしく、恋しい。この船に乗って、母と来られてよかった。結婚して以来、いや、ニューカレドニアに行って以来、もう四年以上も、母と旅していなかった。

答志の港に着いた。山のふもと、港から上ったほんの小さななだらかな土地に、身をよせあって建った小さな家々、これが答志の町だ。家並よりも大きく、漁船がびっしり港にとまっている。ささくれだった桟橋に網やタコつぼ、鳥羽から来たビニール袋入りのキャベツやおしょうゆが、大事そうに下ろされている。

いちばんにぎやかな通りだという、いけすで魚や、伊勢エビを売ってる店の間の一間ほどの路地をのぼっていくと、日にやけた子どもがはだしで遊んでいる。ぎっしり建てこんだ家は瓦屋根、台風の為だろう、網がかぶせてある。そして窓の手すりは、波に千鳥や、桐とかの模様が彫られて『うさぎと亀』の物語を彫りつけた窓もある。

坂を上ると右に郵便局、保育園、そして左手の緑色のペンキ塗りの米屋かラーメン屋かなと思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.